

その名はルフィ

竹村直久

登場人物

田宮芳夫（タミヤヨシオ 37歳）
穂沢拓馬（ホサワタクマ 37歳）
橋本俊（ハシモトシユン 29歳）
伊栗幸喜（イグリコウキ 49歳）

以下声のみ

坂野（サカノ 26歳）フリーター
大森（オオモリ 25歳）無職
谷川（タニカワ 23歳）大学生
牧（マキ 51歳）無職
安斉（アンザイ 22歳）大学生

カルロス（31歳）ファイリピン人の看守。
宝石店の店員。男性40代。
沼倉（ヌマクラ 62歳）金券ショップ経営。
八代（ヤシロ 72歳）田園調布の資産家。

三友銀行の案内係（女性 50代）
三友銀行の呼び出し電子音声（女性）
三友銀行の窓口係（女性 20代）
三友銀行の警備員（男性 50代）

通行人A（女性）
通行人B（男性）
通行人C（男性）

舞台はファイリピンにある入国管理局・收容所の一室である。

無造作に置かれた4つのマットレスにそれぞれ田宮芳夫（37）穂沢拓馬（37）橋本俊（29）伊栗幸喜（49）が寝そべったり胡坐をかいたりしてスマホで通話している。4人とも半裸で半パンである。田宮だけは他の三人から少し離れたところにいる。それぞれのマットレスの周囲には、旅行鞆やナツプザック、多数のスマートホン、酒の空き瓶などが散乱している。
それぞれの持つスマートホンはスピーカーモードで通話されており、相手の声や、その周囲の音が聞こえる。

穂沢「大森君、スタンバイOKかな？」

大森の声「はい」

穂沢「目出し帽とバットもあるよね」

大森の声「はい、ちよつとでもなんていうか」

穂沢「なによ？」

大森の声「こういうの、人の家に押し入ったり、脅迫したりすん

の初めてなもので、上手く出来るかなって」

穂沢「何いってんのよ。もう決心したんでしょ？今まで親にも友

達にも、言いたいことも言えずにウジウジしてたアンタが、

今度は世の中に逆襲する番がきたんだよ」

大森の声「は、はい」

穂沢「な、アンタの人生が花開くんだよ、このミッシェンを実行

すること、アンタも闘うことが出来る様になるんだよ」

大森の声「は、はい」

橋本「谷川、準備いいか？」

谷川の声「はい、ホントに、この一回だけで大丈夫なんですよね

？50万貰えるんですよね？」

橋本「バーカ、んなもん結果出てみねえと分かんねえだろ、まあ

50くらいは軽く超すと思うけど、まずは家に侵入して、

脅して金庫開けさせてからだよ」

谷川の声「僕は50万だけあれば、大丈夫なんです」

橋本「だからまずはミッシェンクリアしろって、金庫に幾ら入っ

てつかも分かんねえだろ、な、だからまずはやれ」

谷川の声「は、はい」

橋本「覆面とハンマー持ってんな？」

谷川の声「はい」

伊栗「牧さんスタンバイOKですか？」

牧の声「はい、います」

伊栗「車は白のミニバンですね？」

牧の声「はい」

伊栗「今から決行なんで、そうですね、長くて30分くらい見て貰えますか、様子によりますけど、進捗状況は逐一連絡入れますから」

牧の声「分かりました」

穂沢「大森君、金庫開けて金が手に入ったら、家出て左にまっすぐね、そしたら角に白のミニバンが停まってるから、運転手もスタンバってるから、谷川君と一緒にそれに乗って逃げればいいから」

大森の声「分かりました」

橋本「谷川も逃げる段取り分かってんな」

谷川の声「はい」

穂沢「大森君、家の前に人通りないかい？」

大森の声「はい、大丈夫です」
穂沢「うし、じゃ決行して」
大森の声「はいっ」
橋本「谷川気合入れてけよ！」
谷川の声「は、はいっ」
大森の声「行きます」

ガサゴソと家の敷地に入って行く音。
ガチャンとハンマーでガラスを割る音。
施錠をはずし、ドカドカと家に入っていく音。

大森の声「そっちの部屋は？」

谷川の声「いません」

大森の声「お前ここにいろよ、二階見てくる」

谷川の声「はい」

ドカドカと階段を上る音。

橋本「どした？」

谷川の声「一階は誰もいないんで、大森さん二階に行ってます」

穂沢「大森君、いたかい？」

大森の声「いや、いません、留守じゃないですか？」

穂沢「金庫はある？」

ドカドカと階段を下りる音。

大森の声「おい、金庫あるか？」

谷川の声「はい、こっこの部屋にあります」

大森の声「デッカイな」

穂沢「レバー回してみて」

大森の声「はい」

ガチャガチャと金庫のレバーを操作する音。

大森の声「開かないです」

田宮「二人で持って車まで運べないかな」

穂沢「谷川君と二人で持ち上げられる？」

大森の声「いや、コレちよつと無理ッスね、据え置きで2

00キロくらいあるんじゃないスか」

穂沢「そうか」

田宮「もうしようがないからさ、タンスの中とか全部開けて、時計とか宝石とか探すしかないよ」

穂沢「大森君、二人で部屋のタンスの引き出しとか全部みて、カ

ネがあればいいけど、時計とか宝石類とか全部集めて」

大森の声「はい」

橋本「谷川も家中全部ひっくり返せ」

谷川の声「はい」

ドタバタと家具の扉を開いたり引き出しを漁る音。

田宮「はずしたかな」

穂沢「何かあったら報告してよ」

大森の声「はい」

伊栗「牧さんどう？周りの様子は変わったことないですか？」

牧の声「はい、大丈夫です」

大森の声「ルフィ、腕時計が一つと、あと高そうな万年筆と、あ

と小さい宝石みたいのがついたネクタイピンがありました」

穂沢「女性用の指輪とかはない？」

大森の声「まだ探してみます」

藤田「谷川はどうだ？」

谷川の声「二階の部屋の鏡台にネックレスが二つとイヤリングみ

たいのがありました」

穂沢「大森君、通帳とかキャッシュカードとかない？」

大森の声「どこにもないですね、引き出し全部開けましたけど」

田宮「もうないだろ、しようがないよ、撤収しよう」

穂沢「じゃああった物だけ袋に入れて、家出て」

大森の声「分かりました」

橋本「谷川、大森と家出る」

谷川の声「はい」

バタバタと歩き、家の扉を開いて外へ出る音。

田宮「これじゃ幾らにもならないな」

穂沢「ここはもうしようがないよ、次いこ」

伊栗「牧さん、今二人が来ますから、乗せたら予定のルートで走ってください」

牧の声「了解です」

ボタンと車のドアが閉まる音。
車が走りだすエンジンの音。

穂沢「大森君あったものざつと言ってみて」

大森の声「はい、腕時計がひとつと」

穂沢「どんな時計？メーカーなんて書いてある？」

大森の声「はい、Gショックっぽいけど、セイコーって書いてあります」

穂沢「他は？」

大森の声「高級万年筆と宝石つきのネクタイピンと、あと女性用の真珠っぽいネックレスと、綺麗な緑色のネックレスと、イヤリングです」

穂沢「それ全部写メ撮ってアプリに挙げてくれる？」

大森の声「分かりました」

穂沢は通話を切る。

橋本「谷川」

谷川の声「はい」

橋本「分かってんだろうけど、今回家主がいなかったから、金庫

開けてカネ取るの出来なかっただろ？」

谷川の声「はい」

橋本「失敗な、今んだとほとんどはしたガネにしかなんねえから、この案件は収入にならねえから」

谷川の声「そんなさ」

橋本「しようがねえだろ。だからさ、お前一回きりつつつてたけど、次もやるか？今日あと二件予定入ってっけど、お前はやらないはずだったけど、カネになんねえと可哀そうだからやらしてやってもいいぞ」

谷川の声「あ、はい、そしたらもう、やるしかないんで」

橋本「しようがないとか、イヤイヤやるとか、消極的だと上手くいかねえかな、積極的に、やってやるぞ！みてえにやんねえと失敗すつからな」

谷川の声「はい」

橋本「お前借金返してえんだろ？返さねえとヤベエんだろ？」

谷川の声「はい」

橋本「じゃ気合入れてけよ」

谷川の声「はい」

橋本は通話を切る。

伊栗「牧さん、予定のルートで吉祥寺駅に向かってください」
牧の声「分かりました」

車が走る音。

伊栗は通話を切る。

田宮「ちくしょう、はずしたなあ」

穂沢「もう一回いる時に出直せばよかったかな」
カルロス（看守）の声「ホサワサン」

穂沢「what? what is it? (なに?なんだい?)」

カルロスの声「Please come over for a moment (ちよつと来て
ください)」

穂沢「なんだよ」

穂沢は立って下手へはける。

伊栗「がっかりしててもしょうがないですから、切り替えて次に
行くしかないですよ」

橋本「ですね、でも次は宝石店だから現物が絶対あるんですよ
?」

田宮「うん」

穂沢がガラスの小瓶を持って戻ってくる。

伊栗「なんですかそれは」

穂沢「ん、青酸カリ」

伊栗「なんでそんなもの」

穂沢「タイにいた時西山さんがさ、裏切り者を消す用だとかいっ
て」

橋本「マジっすか」

穂沢「カルロスが少し売ってくれていうから」

田宮「カルロス何に使ったの?」

穂沢「（笑）知らない」

穂沢は小瓶を鞆に入れる。

伊栗のスマホが着信音を発する。

伊栗「はい」

牧の声「吉祥寺近くきました」

伊栗「早かったですね、店の位置分かりますか？北口のロータリ

ーから五日市街道に続く道の途中なんですけど」

牧の声「はい、アプリの地図で確認しました」

伊栗「じゃあお店の前に車停めて下さい」

牧の声「分かりました」

穂沢がスマホを発信する。

大森の声「はいルフィ」

穂沢「さっきの覆面持ってるよね？」

大森の声「はい」

穂沢「バットもあるね？」

大森の声「はい」

橋本もスマホを発信する。

橋本「谷川」

谷川の声「はい」

橋本「さっきの道具持ってんな？」

谷川の声「はいハンマーあります」

橋本「靴もあるな」

谷川の声「はい」

橋本「いいか、ぜってえ躊躇うなよ、少しでも躊躇ったら失敗す
つからな。とっこんだらあるだけブーツ靴に突っ込んでけ」

谷川の声「はい」

穂沢「大森君車から店の中見える？」

大森の声「はい」

穂沢「他にお客がいらないか確認して、店員ひとりだけになったら、タイムイングで突入ね」

大森の声「は、はい」

橋本「谷川、今度は中に人がいるの確定だかんな、抵抗してきたら殴れよ、ひるまねえでガツンとやんだぞ」

谷川の声「は、はい」

伊栗「牧さん、エンジンはかけっぱなしでギアもドライブに入れといてください、ブレーキ踏んだ状態で、後ろのドアは開けっ放しにして、二人が乗ったら急発進してください。他の車とかに多少ぶつかっても構わないですから、どんどん飛ばしてくださいね」

牧の声「はい」

田宮もスマホを発信する。

田宮「坂野何処まできてる？」

坂野の声「うッス、例のパチンコ屋の駐車場の料金支払い機の裏にいます」

田宮「じゃーそこで待ってて、他の悪いことしてるグループが駅前の宝石店でタタキやった後で、車でそこにくることになってるから。人数は3人ね、そこで車乗り捨てて逃げる計画らしいから。多分3人のうちの一人が大きな鞆二つ持つていくと思うんだよね、そしたらそいつの後つけて」

坂野の声「了解ッス」

大森の声「ルファイ、今お店にいたお客さんが出て行って一人にな

りました」

穂沢「うし、じゃ決行ね」

橋本「谷川行けよ」

谷川の声「はいっ」

車を降りて走る音。

店のドアを開けて店に入る音。

店員の声「なんですか」

バットとハンマーでショーケースのガラスを叩き割る音。

店員の声「なにをするんですか！」

大森の声「うるさいっ！殴りたいか！」

ガシヤンガシヤンと音が続く。

大森の声「逃げ逃げ逃げー！」

谷川の声「ど、どこ優先すればいいですか」

橋本「高いやつはショーケースの上の段に並んでっから、そっから優先しろ」

谷川の声「は、はい」

穂沢「どんどん詰めてけ」

大森の声「はいっ」

略奪している音が響く。

穂沢「店員さんは何してる？」
大森の声「奥の方に入りました」

ジリリリー！ と非常ベルが鳴り響く。

牧の声「あ、非常ベル鳴ってますー！」

伊栗「落ち着いて大丈夫ですから、二人がくるまでちゃんと待ってください」

牧の声「は、はい」

穂沢「鞆いっぱいなるまでつめてよ」

谷川の声「ちよっともう逃げないと」

大森の声「バカ、まだ入んじゃんかよ」

橋本「オイ、高えの取りこぼすんじゃねえぞ！」

穂沢「時計とネックレス全部入れた？」

大森の声「はい」

牧の声「ルフィ！ お店から出てきませんよ、周りの人たち見てます」

伊栗「もう出てくるから大丈夫ですよ」

穂沢「指輪も全部入れたかい？」

大森の声「はい」

谷川の声「もうほとんど商品ないです」

穂沢「いいかいタミさん？」

田宮「うん」

穂沢「うし、じゃ撤収」

大森の声「はい」

橋本「谷川、車に戻れ」

谷川の声「はい」

駆け出す音。

伊栗「牧さん今二人くるから、乗ったら急発進ね」
牧の声「はい」

二人が乗り込み、急発進する音。ボタンとドアが閉まる音。

大森の声「いけいけいけいけー！」

非常ベルの音が遠ざかる。
ガシャンと車がぶつかる衝撃音。

大森の声「なにやってんだよ」

伊栗「どうしました？」
牧の声「歩道のガードレールにぶつかって」
伊栗「車走れますか？いいから走ってください」
牧の声「はい」

ブオンとエンジンを吹かす音。ギアチェンジしてバツク、急発進する音。キュルルル……とタイヤが軋む。

以降走行音が続く。

田宮「いいかい坂野、今宝石店でタタキやった奴等の車がそっち
坂野の声「はい」
田宮「見えたら教えて」

坂野の声「了解ッス」

スマホからパトカーの音が遠く聞こえる。

穂沢「どつかパトカー見える？」

大森の声「いや、見えないです」

伊栗「牧さん落ち着いて運転してくださいね」

牧の声「は、はい……」

伊栗「大分離れたらスピード落として、目立たないようにして」

牧の声「はい」

穂沢「あと大森君、朝の空き巣の時の収穫も、袋ごと一緒に鞆に

入れといてくれる？」

大森の声「分かりました」

穂沢「（通話口を塞いで）鞆持たせんの誰にする？」

田宮「谷川がいいだろ」

穂沢「だな」

橋本「おい谷川、車停めたら鞆は二つともお前が持って、今アプ

リに送る地図ンとこまで持っていけ」

谷川の声「あ、はい、持ってつたらどうするんですか？」

橋本「指示した場所にコインロッカーがあっから、そこにいれて

鍵かけて、鍵の持ってき場所はまた指示すっから」

谷川の声「分かりました」

橋本「重要な役目だから、しくじんなよ」

谷川の声「あ、はい」

伊栗「車置いて解散しましたら牧さんはまた駅前のレンタカー屋

に行つて、次の現場用の車借りといてくださいね」

牧の声「分かりました」

穂沢「大森君、車降りたら慌てないでね、普通にのんびり歩けば

いいから、オーラ消してね、警官いたら職質受けないように避けて」

大森の声「はい」

橋本「谷川も普通に歩いてけよ、ぜってえオドオドしたりすんな、それとオマワリいたらぜってえ目合わせたり、チラ見して目そらしたりすんな」

谷川「は、はい」

坂野の声「あ、ルフイ、きました白のミニバン、あれですかね」

田宮「三人乗ってる？」

坂野の声「はい」

田宮「よし、じゃ見つからないように、様子教えて」

坂野の声「はい」

田宮「周りに人とかいない？」

坂野の声「今んとこいないッス。駐車場のフェンスの外はいつぱ

い歩いてますけど」

田宮「警察いない？」

坂野の声「はい、今白いバン停めてます。三人降りてきます」

バタンバタンと車のドアが閉まる音。

田宮「ここでバラバラになるから、鞆持ってるやつの後つけて」

坂野の声「はい」

田宮「他の二人が追いついてこれないくらい離れたら鞆を取って逃げて」

坂野の声「了解ッス」

田宮「なんか道具持ってる？」

坂野の声「懐にボール入ってます」

田宮「やりすぎないようにな、鞆が取ればいいんだから」

坂野の声「了解ッス」

田宮「覆面するのも忘れないでね」

坂野の声「うッス、今日出し帽しました」

穂沢「大森君オマワリに注意してね、捕まったら終わりだからね、報酬は今日のブツ換金できたら口座に振り込むから、一週間から十日みといてくれる？」

大森の声「はいルフィ」

伊栗「牧さんも何気ない素振り歩いて下さいね」

牧の声「了解です」

橋本「谷川」

谷川の声「はい」

橋本「地図確認したか」

谷川の声「はい、大丈夫です。あの、今日の報酬ってどれくらいになるんですか？」

橋本「まだ分かんねえよ、宝石とか業者に頼んで鑑定してみねえと、ん〜でも先輩たちは千以上は見てるみたいだから、どう転んでもお前の取り分が50を下ることはねえと思うよ」

橋本「でもお前、明日もちゃんとバイトいけよ、今日のことは何もなかったんだかな」

谷川の声「はいルフィ」

坂野の声「ルフィ、他の二人駐車場出て遠くに行つて、鞆持つてるヤツひとりになりました」

田宮「よし」

坂野の声「じゃ、いきます」

パタパタと走る音。

谷川の声「えなに、なんですか？」

ドカッ、ドカッと殴る音。

谷川の声「いたっ、何すんですか。あつ、やめっ、返せ」

パタパタと走る音。

牧の声「あつ、ルフィ、なんか谷川さんが襲われています」
伊栗「えなんで？誰にですか」

牧の声「分かんないです」

大森の声「おい、何やってんだよ！」

と走る音。

穂沢「どしたんだよ」

大森の声「待てコラァ」

バタバタと走る音。

穂沢「おい、大森君、なにが起きた？」

大森の声「谷川が鞆取られました」

穂沢「マジか、誰だよ」

大森の声「分かりません」

バタバタと走る音。

牧の声「大森さんが追いかけてます」

伊栗「谷川さんは？」

牧の声「殴られて倒れてます」

伊栗「何やってんですか」

田宮「坂野絶対に追いつかれるなよ」

坂野の声「うッス」

大森の声「待てコラァ！」

穂沢「おい、大森君深追いすんな」

大森の声「でも」

穂沢「いいから、つかみ合いとかなったら目立ってオマワリに見
つかるだろ」

大森の声「は、はい……でも、ハァ、ハァ……」

田宮「どうだ坂野」

坂野の声「駐車場で別れたヤツが追いかけてきましたけど、諦め
たみたいですよ。俺陸上やってたスから、余裕ッスよ」

田宮「警察いない？」

坂野の声「はい」

田宮「今どこ？」

坂野の声「大通りから曲がって細い道に入りました、ハァ、ハァ
……」

田宮「よく後ろ見て気を付けるんだよ」

坂野の声「はいっ」

田宮「顔は見られなかったよね」

坂野の声「うッス、今覆面とりました」

田宮「相手はどした？殴ったの？」

坂野の声「血出てたけど大丈夫ッスよ、動いてたし、でも通報さ
れないスカね」

田宮「その心配はないよ。そいつ等だって寶石店でタタキやって
る訳だから、警察なんか呼んだら自分たちが逮捕されちゃ

うからね」

坂野の声「いや、最高ッスね！ザマアみろだ！俺今生きてる実感があるんスよ！次の任務が待ちきれないくらい、あゝやりたくてしょうがないッス！」

田宮「……」

穂沢「大森君、今襲ってきたのってどんなヤツだった？」

大森の声「若いっぽかったです。20代くらい、下はジーパン履いて、上はトレーナーみたいな、すっごい走るの早くて」

穂沢「知ってるヤツ？」

大森の声「知らないですよ、ていうか遠かったし、顔も覆面して見えなかったし」

伊栗「牧さん、コレはきつと私たちの計画知ってたんじゃないですかね、もしかして牧さんこの計画のこと誰かにお話しされました？」

牧の声「そんな訳ないじゃないですか」

伊栗「誰も知らないのにこんな都合のいいところで襲われますかね、後で調べれば分かりますからね、誰から情報が漏れたのか」

牧の声「私じゃありませんよ、酷いですよ、私は信頼して頂いてると思ってるのに」

伊栗「私も牧さんがそんなことするとは思ってませんけど」

牧の声「そうですよ、私は使って頂けるだけでも感謝してるんですから」

伊栗「分かりました。でも今回残念ながらブツを取られてしまったので報酬は出せませんね」

牧の声「え、そんな」

伊栗「ガツカリしてるのは私も同じですよ、でもまた次の現場がありますから、今度は周りに怪しいヤツがいなかよく気

を付けてくださいね」
牧の声「……分かりました」

伊栗は通話を切る。

大森の声「誰が取ったんですかね」

穂沢「分かんないけど、どっかから俺等の計画が漏れてたんだろ」

大森の声「誰からですか」

穂沢「そりゃ君たちの中の誰かなんじやないの？君等以外に知ってたヤツはいないんだから、君誰かに計画の話したんじゃない？」

大森の声「してませんよ絶対」

穂沢「とにかくさ、こんなことになっちゃったから今回の収穫ゼロだよ」

大森の声「報酬はどうなるんですか」

穂沢「そりゃ無理でしょ、だって取られちゃったんだから」

大森の声「そんな」

穂沢「そんなったって、しょうがないよ」

大森の声「そんな」

穂沢「まあ今日の現場もあるからサ、次でまた頑張んなよ、次が上手くいったら君の疑いも晴れるんだからサ」

大森の声「……はい」

穂沢「アプリに現場の地図送るから、時間間に合うように移動してね」

大森の声「分かりました」

穂沢は笑顔で通話を切る。

橋本「谷川大丈夫か？」

谷川の声「すいません。いきなり後ろから殴られて、鞆から手離しちゃいました」

橋本「怪我したの？傷とかどんな感じ？」

谷川の声「肩と頭を何回か鉄の棒みたいので殴られて、凄い腫れてます」

橋本「悪いけど病院は行くなよ、通報されて傷害事件になるから、お前等がやったこともバレちゃうからな」

谷川の声「は、はあ」

橋本「血出てんの？」

谷川の声「血は止まってますけど、すっごく痛いです」

橋本「ドラッグストアで湿布でも買って冷やしとけよ」

谷川の声「はい、あの、今日の報酬って幾らになりますか？」

橋本「バーカ、報酬どこじゃねえだろ、ブツ全部取られといて」

谷川の声「えっ、でも」

橋本「バカ言ってるじゃねえよ、お前が取られたから俺等にだって一円も入ってこねえじゃねえか」

谷川の声「……でも、僕そもそも一回だけの約束だったじゃないですか」

橋本「そうだな。どうする？今日次の現場も予定してっけど、もうやめとくか？」

谷川の声「そんなあ、このまま一円も貰えないんじゃないですよ」

橋本「じゃやるか？」

谷川の声「やりたいけど、今日はもう出来ません、怖くて手がブルブル震えちゃって」

橋本「そっか、じゃまた声かけっから、それまでに怪我治しとけ」
谷川の声「はい」

橋本は笑いを堪えて通話を切る。

田宮「坂野、誰か後つけたりとかしてない？」

坂野の声「はい、もう全然大丈夫ッス」

田宮「そう、じゃそのまま三鷹駅に行つて、北口のロータリーの3番バス乗り場に行つて。兵頭つてヤツが待ってるから、そいつにブツ渡して。目印はサンダラスしてて黒のシャツね。ブツ渡したら駅から電車乗って次の現場に向かってくる？」

坂野の声「了解ルフィ！俺命令だしてくれば何でもやるッス！」

田宮「は、いい、頼りにしてるよ」

と通話を切る。

伊栗「ミッションコンプリートですな」

穂沢「ウェイ！」

橋本「サクセス！」

田宮「今回は恐いくらいパーフェクトだったな」

伊栗「どのくらいになりますかね」

穂沢「千はいくつしよ」

田宮「鑑定次第だけど、推定二千はいつてほしいところ」

穂沢「ウェイウェイ」

橋本「今口座って幾らでしたっけ」

伊栗がスマホを操作する。

伊栗「226万」

橋本 「そんなかゝ」

穂沢 「タイのカネ持ち越せなかったのが痛かったなあ。あれがありゃ1億はいつてたでしょ？」

伊栗 「まあそれはもうしようがないですよ、パクられなかっただけでも良かったんですから」

橋本 「んゝでもここでもこの有様じゃないツスカ。早く逃げたいツスよ」

穂沢 「お前女に会いたいんだろ」

橋本 「そりや会いたいツスよ、てかやりてえツス」

穂沢 「こっちの子だつてみんな可愛いじゃんかよ、なんでそんな操を立てちゃってんの？」

橋本 「俺ダメなんスよ、なんか匂いが違うっていうか、出来ないんスよ」

穂沢 「ふうゝん勿体ない、上手な子もいっぱいいるのにねえグリ

さん」

伊栗 「はい、もう何ていうか驚くべきテクニクの持ち主とか」

田宮 「ちよつと皆カネないんだからさ、少しは我慢しなさいよ」

穂沢 「ホントそうだよなあ、でも我慢したくない」

田宮 「今はカネ貯めることに専念するしかないんだから」

穂沢 「次のも大口になるといいなあ」

伊栗 「今のと次のとが口座に入れば、何処にでも逃げられますよ」

橋本 「何処がいいスカね」

穂沢 「そうねえ」

橋本 「タイか日本に戻るのにはさすがにヤバイですしね」

穂沢 「インドなんかいんじゃない？人多いし、日焼けしてターバン巻いてインド人になっちゃえば」

橋本 「アハハハ……」

伊栗 「でもインドは遠いですからねえ」

穂沢 「あとはカンボジアとかベトナム、ミャンマーあたり？」

田宮 「何処に行ってもカネがあればさ、現地のそういう系の人紹介して貰えばなんとかなると思うけど」

橋本 「安いのは何処っスか？」

伊栗 「そりゃ貧しい国の方が物価は安いけど、パキスタンとかも遠いから、行くのにカネかかりますね」

橋本 「早く逃げてえなあ、ここにいたら日本に引き渡されちゃうじゃないですか」

田宮 「裁判もそう長引かせられないしな」

橋本 「田宮さんの裁判どのくらい持たせられそうスか？」

田宮 「女房に訴えさせて、後からあれもしたこれもしたって訴訟増やしててさ、公判があと何回か続くから、でも長くて半年くらいかな」

橋本 「穂沢さんは？」

穂沢 「グリさんと一緒に交通事故で、相手がおねるようになってんだけど、カネ寄こせカネ寄こせってうるせえんだよ」

伊栗 「ちよっとこっちの弱みも分かっちゃってる感じですね」

橋本 「自分は通りがかりのヤツと喧嘩して揉めてんスけど、やっぱ引き延ばすのキツくなってきてんスよ」

穂沢 「もしさ、こっからベトナムとかに逃げるとしたらさ、幾らあれば行ける感じ？」

田宮 「そうだな……まず病気になったことにして、病院に搬送して貰うのにカルロスに20万払うだろ、で病院から逃げるの見逃して貰うのに10万」

伊栗が話を聞きながら電卓を打っている。

田宮 「二セの身分証とパスポート作るのに20万、観光ビザと入

国手続き取って貰うのに5万。ベトナムまで行くのに飛行機で幾らくらいかな」

穂沢「3万もありゃ行くんじゃないかね？」

田宮「うん、で住むとこ借りたりするのに20万くらい？」

穂沢「あと食費と生活費があるでしょ」

橋本「全部足すと幾らです？」

伊栗「実費が78万で、暫くの生活費とかで最低でも20万くらいはいるでしょうから、少なくとも一人100万はないとですね」

穂沢「4人で400万か」

橋本「んで、口座が今226万でしたっけ？」

伊栗「うん」

橋本「全然足りないじゃないッスか」

穂沢「頑張ろう！」

伊栗「はいっ」

橋本「いつまでここにいなきゃいけないんスカね、裁判終わったら日本に還されちゃうだろうし、その前に逃げないと」

田宮「橋本次の補充人員はどうなってる？」

橋本「あ、大丈夫ッス、新人の安斉ってヤツ雇ってますから」

とスマホを発信する。

橋本「もしもし」

安斉の声「はい」

橋本「安斉か？」

安斉の声「はい」

橋本「今どこ？」

安斉の声「今電車で阿佐ヶ谷に向かってます」

橋本「よし、じゃ着いたら待ち合わせ場所にいるよ、後で二人くるから」

安斉の声「分かりました」

田宮「グリさん次の車は大丈夫？」

伊栗「はい、もうレンタカー借りてるはずですから、確認します」

と通話する。

伊栗「もしもし、牧さん？」

牧の声「はい」

伊栗「車は借りれました？」

牧の声「はい」

伊栗「車種はなんですか？」

牧の声「黒のSUVでマツダのです」

伊栗「分かりました。ではアプリで送った地図の位置へ向かって

いただけますか？」

牧の声「分かりました。阿佐ヶ谷の駅前ですね」

伊栗「そうです。現地着いたら連絡してください」

牧の声「分かりました」

伊栗は通話を切る。

橋本「次の物件はどんななんスか」

田宮「金券ショップ、62歳の沼倉さんて人がひとりで経営しててさ。それなりの現金があるって見込みなんだけどね」

穂沢「実行部隊のメンツは？」

田宮「坂野にリーダーやらせてあと大森と新人の安斉」

穂沢「えっ、でもさっき坂野に襲わせたのってバレないかい？」

田宮「覆面してたし、大丈夫だろ、大森も顔は見えなかったって
いってるし」

穂沢「まあねえ、確かに坂野は使えるけど、アホだからなあ」

田宮のスマホが着信音を鳴らす。

田宮「(出て)はい」

坂野の声「坂野ツス」

田宮「おう、ブツは無事に兵頭に渡した？」

坂野の声「はい」

田宮「そう、ご苦労さんね」

坂野の声「それよりルフィ、俺もう次の現場きて周り確認してる
んスよ」

田宮「えっ、まだ早いだろ」

坂野の声「でもこゆのは周到に準備してたほうがいいじゃないス
か」

田宮「その辺だって何処に防犯カメラあるか分かんないからね、
もうお前どっかから撮られてるかもしれないよ」

坂野の声「そうなんスか、でも大丈夫ツスよ、本番の時は着てる
服全部着替えてきますから」

田宮「早く離れなよ、下見しなくても店に沼倉さんて人しかいな
いことは分かっているんだから」

坂野の声「うツス。でも暇なんスよね」

田宮「いいから、集合時間までどっかに隠れてなよ、2時になっ
たら駅のベンチに二人くるから」

坂野の声「了解ツス」

田宮「今日の実行部隊は一人は経験者で、もうひとり新人だか
ら、坂野がリーダーシップ取って教えてやってな」

坂野の声「うッス、光栄です。任してください」

田宮は通話を切る。

穂沢と橋本がそれぞれスマホを操作して通話を始める。

穂沢「大森君着いたかな？」

大森の声「はい」

穂沢「もうベンチにいるの？」

大森の声「はい」

穂沢「あと二人くるからね」

大森の声「はい」

穂沢「さっきの件は残念だったけど、今度はしっかり名誉挽回してよ」

大森の声「はい」

穂沢「今回は大森君の他に新人の安斉君ってのと、ベテランの坂

野ってのがくるから、今回はその坂野ってのがリーダーだね、

それと逃げる車の運転はさっきと同じ牧さんだから、安斉

君と坂野は宝石店の件は知らないからさ、ブツを取られた

ことは話さないでね」

大森の声「分かりました」

橋本のスマホが着信音を発する。

橋本「はい」

安斉の声「阿佐ヶ谷駅に着きました、今ロータリーにいます」

橋本「南口な」

安斉の声「はい」

橋本「ベンチに青いキャップ被ったヤツいねえ？」

安斉の声「います」

橋本「そいつが今日の実行部隊の大森ってヤツだから、先輩だからちゃんと挨拶しとけよ」

安斉の声「はい」

歩いて近づく音。

安斉の声「あ、あの大森さんですか？」

大森の声「はい」

安斉の声「僕安斉です。宜しくお願いします」

大森の声「あ、はい」

橋本「あとな安斉」

安斉の声「はい」

橋本「もうひとり坂野ってのがくるから、その坂野がリーダーね」

谷川の声「はい」

橋本「それと逃げる車は牧さんて人が手配してくるから」

安斉の声「分かりました」

伊栗のスマホが着信音を発する。

伊栗「はい」

牧の声「牧です。今阿佐ヶ谷のロータリーにいます」

伊栗「南口ですね」

牧の声「はい」

伊栗「それじゃロータリーから中杉通りを青梅街道方向に行くと、50メートルくらい行った左側に三友銀行がありますから、その前に車停めてください」

牧の声「分かりました」

伊栗「そこで待機してて下さいね、逃げるルートは分かっていますよね？」

牧の声「はい、三人乗せたら青梅街道に出て荻窪方向に行きます」
伊栗「はい、落ち着いてくださいね、飛ばしてもまたぶつけない様に、確実に運転するようにしてください」

牧の声「はい」

田宮がスマホを発信する。

田宮「坂野きてるか？」

坂野の声「中杉通りから駅前に向かってます」

田宮「服は着替えたの？」

坂野の声「勿論です」

田宮「集合場所のベンチに二人来てるから、それが大森さんと安

斉さんね」

坂野の声「了解ッス」

田宮「合流したら教えて」

坂野の声「はい、もうきました。こんちはリーダーの坂野です」

大森の声「あ、どうも大森です」

安斉の声「どうも、安斉です」

坂野の声「何か道具持ってきた？」

大森の声「僕はスパナですけど」

安斉の声「僕はカナヅチ持ってます」

坂野の声「いいでしょう。コツはね、絶対舐められないこと、それと躊躇しない、ね、相手に恐怖を与えないと上手いきませんか」

大森の声「は、はあ」

安斉の声「分かりました」
坂野の声「よし、じゃ行こうか」
大森の声「はい」
安斉の声「はい」

街を歩きだす音。

田宮「お店は中杉通りを青梅街道方向に行って、左側に道路に面して小さいケーキ屋があるから、その隣の金券ショップね」
坂野の声「はい」
田宮「逃走用の車はその先、三友銀行の前に停まってるから、黒のワンボックス、見えるかな」
坂野の声「見えました、おい大森と安斉、あの車だからな、覚えておくように」

大森の声「……」
安斉の声「はい」
坂野の声「おい大森、聞こえたか？」
大森の声「はい」
坂野の声「チームワークはコミュニケーションが大切なんだよ、聞こえたらちゃんと返事してくれよ」
大森の声「あ、はい」
田宮「店番は店主の沼倉さんというオジサンだけの筈だから、もし沼倉さんの他に客がいたら一人になるまで待つように」
坂野の声「了解ッス」
田宮「店に入るのは坂野と大森ね、安斉は外で人が入ってこない様に見張らせて」
坂野の声「現地着きました」
田宮「中の様子はどう？」

坂野の声「しよぼくれたオッサンひとりだけです」

田宮「よし、じゃやって」

坂野の声「了解ッス、大森は俺と一緒にきて、店主の制圧は俺がやるからな」

大森の声「はい」

坂野の声「安斉は店の前で見張ってて、俺等が出るまで誰も店に入らせないように」

安斉の声「はい」

橋本「安斉、誰か店に入りそうになっただらなんでもいいから難癖つけて、ぜってえ店に入らせんなよ」

安斉の声「はい」

店の入り口のドアを開く音。来客を知らせるチャイムが鳴る。

沼倉の声「いらっしやいませ」

坂野の声「オイ！殴られたくなかったら黙ってカネ全部出せ」

ガシヤンガシヤンとショーケースをパールで叩き割る音。

沼倉の声「何するんですか」

坂野の声「早く！レジと金庫開けて有りガネ全部出せっていったんだよ！」

ガシヤンガシヤンとガラスを割る音。

沼倉の声「やめなさいよ、君たちこんなことしたら捕まるだけだ

よ」

坂野の声「舐めんじゃねえぞこの野郎、ぶつ殺すぞコラァ！」

ドカッ、ドカッとボールで沼倉を殴る音。

沼倉の声「やめなさいっ、やめて、ああゝゝっ」

坂野の声「カネ出せコラ」

チーンとレジスターを開く音。ガサゴソと紙幣をつかむ音。

坂野の声「あと金庫は何処だよ」

沼倉の声「き、金庫は……ここにはないよ」

坂野の声「嘘つけコラァ！」

ドカッとボールで殴る音。

沼倉が床に倒れる音。

沼倉の声「ほ、ほんとうですって……」

田宮「坂野、落ち着いて金庫探してみて、大概カウンターの後ろの下とかにあるから」

坂野の声「了解、大森金庫探せ」

大森の声「はい」

バタバタと物色する音。

大森の声「コレじゃないですかね」

坂野の声「レバー引いてみるよ」

ガチャガチャと金庫のレバーを動かす音。

大森の声「鍵は刺さってるけどダイヤルが回ってて開かないです
ね」

坂野の声「おい沼倉！ダイヤルの番号教えろよ」

沼倉の声「……」

大森の声「舐めてますよ、舐められてんじゃないすかりーダー」

坂野の声「うるせえこのヤロウ！ダイヤルの番号教えろって言う
てんだよ！」

ドカッ、ドカッと殴る音。

沼倉の声「うう……うう……」

大森の声「なんだよりーダー、俺が制圧するっていったのに」
坂野の声「コラァ、ホントに殺すぞこのヤロウ！」

ドカッ、ドカッと殴る音。

田宮「坂野、スマホ音声モードにして沼倉さんの耳に近づけてく
れる？」

坂野の声「はいっ」

田宮「ねえ沼倉さん。コイツのいう通りにした方がいいですよ。
コイツマジでやばいんですよ、金庫のダイヤル教えた方が
いいですよ、コイツ命令されれば人殺しなんてなんとも思
ってないですからね、番号教えないと本当に死んじゃいま
すよ」

沼倉の声「……」

坂野の声「死んでもいいのかコラア！」

ドカドカとメチャメチャに殴る音。

沼倉の声「うつ、うううう〜っ」

坂野の声「ねえルフィ、俺思いつきりやつちやつてもいいですか
ね」

田宮「いいよ、でも死んじゃったらダメだからね」

坂野の声「了解ッス、よお〜し、思いつきり振りかぶってえ〜オ
リヤー！」

ガコーンと衝撃音。

ドサリと沼倉が倒れる音。

坂野の声「おい」

沼倉の声「……」

大森の声「死んだんじゃないですか」

坂野の声「……」

田宮「どうしたよ」

坂野の声「ルフィ、やつちやつたかもしんないス」

田宮「レジのカネはどのくらいあったの？」

坂野の声「10万くらいッス」

田宮「沼倉さんはどうなった？」

坂野の声「動かないッスね、血だまりになってます」

橋本「安斉、店の表はどうだ？誰もきそうにねえか？」

安斉の声「はい、あんまり人も通らないです」

穂沢「大森君その金庫って大きいのか？」

大森の声「100キロくらいですかね」

穂沢「三人でやれば持ち上がる？」
大森の声「はい、持ち上がるとは思うけど、外に出して車まで運ぶの時間掛かりますよ、その間に警察呼ばれるんじゃないですか」

穂沢は田宮の顔を見る。

田宮は頷く。

穂沢「じゃやってみようか」

橋本「安斉、店に入って金庫持って車に運ぶの手伝え」

安斉の声「はい」

ドアを開けて店に入る音。チャイムが鳴る。

安斉の声「ひえっ」

橋本「なんだよ？」

安斉の声「人が倒れてます。血が出てる」

坂野の声「お前ビビってる場合じゃないんだよ、ホラ手伝えて」

安斉の声「は、はい……」

坂野の声「大森そっち回って、安斉、そっちから引っ張って」

安斉の声「は、はい」

坂野の声「いいか、せーの」

安斉の声「ううっ……」

坂野の声「いったんカウンターに乗せて、そしたら俺もそっち回るから」

ガシャンと金庫がカウンターの上に置かれる音、

伊栗「牧さん、計画変更になって、車に金庫乗せていくことになりましたから」

牧の声「ええっ？」

伊栗「そこから車バック出来ますか？なるべく店の前に近づけて、トランク開けといてください」

牧の声「わ、分かりました」

入り口のドアが開いてチャイムが鳴る。
金庫を運んでいるジャリジャリと割れたガラスの上を歩く音。

田宮「どう状況は？」

坂野の声「はあ、はあ……今店出ました。でも、重いッス」

大森の声「いや、コレやっぱ無理じゃないですかね」

坂野の声「頑張れよ、安斉大丈夫か？」

安斉の声「うっ、うう……」

牧の声「ルフィ、後ろに車が一台停まってこれ以上下がれないです」

伊栗「じゃそこから牧さんも車降りて運ぶの手伝ってあげてください」

牧の声「はい」

車を降りて駆けていく音。

田宮「坂野あとどれくらい？」

坂野の声「10メートルくらいです。運転手もきて手伝ってます」
通行人A（女性）の声「キャーッ」

田宮「どうした？」

坂野の声「誰か店の中の沼倉さん見つけたみたいです」
安斉の声「ああっっ」

ドカンと金庫が地面に落ちる音。

坂野の声「なにやってんだよ！」

田宮「どうした？」

坂野の声「落とししました安斉のせいで」

ウウーとパトカーのサイレン。

大森の声「きた、もう無理ですよ」

坂野の声「あつ、ちょっと牧さん、オイ安斉」

田宮「どした？」

坂野の声「牧さんと安斉が車にいつちやいました」

大森の声「ダメですよもう逃げましょう」

田宮「分かった坂野、もう金庫はいいから車に乗って」

坂野の声「了解ッス。撤収！」

パタパタ走り、ボタンボタンと車のドアが閉まる音。
ブオンとエンジンを吹かして急発進する音。

伊栗「牧さん逃走ルートは予定通りで」

牧の声「はいっ」

伊栗「荻窪まで行ったら駅前で三人降ろして解散です、牧さんは

なるべく人目に付かないところに車停めて逃げてください」

牧の声「はいっ」

坂野の声「ルフィ、申し訳ありません。任務を遂行することがで

きませんでした」

田宮「まあ上手くいかない時もあるから、また次頑張ればいいよ」
坂野の声「ありがとうございます。でも沼倉さんはどうでしょう

かね」

田宮「見つけた人が救急車呼んでくれてるだろ、気にしててもし
ようがないからさ、切り替えていこう」

坂野の声「……了解ッス」

穂沢「大森君、今回の報酬1万くらいにしかならないと思うけど、
ま、短い時間だったしそんなに安くもないでしょ」

大森の声「はい」

穂沢「また大きな案件もあるからサ、また連絡くんの待っててよ」
大森の声「はいっ」

橋本「安斉、初めてだけどよくやったな」

安斉の声「はい………すいません。金庫落としちゃって」

橋本「まあしようがねえよ。収穫は少なかつたけど、またいい案

件もあるからな、また指示がくんの待ってるよ」

安斉の声「はい」

田宮「坂野、レジから取った現金幾らある？」

坂野の声「12万6千円と、あと小銭ッス」

田宮「そしたらそれ袋とかにまとめといてくれる？また兵頭に取
りに行かせるから」

坂野の声「了解ッス」

田宮「荻窪駅の快速の上り線ホームの、新宿方面の一番前にいて」
坂野の声「分かりました。ルフィ、俺また次の指令待ってますか

ら、俺、命令出してくれば何でもやりますから」

田宮「分かった、こっちも頼りにしてるから」

坂野の声「はいっ、また宜しく願いますッス」

それぞれ通話を切る四人。

伊栗「やり過ぎたんじゃないですかね」

穂沢「もし死んでたらサ、警察が本腰入れてくるんじゃないね？」

橋本「坂野ってまじヤベエ奴ですな」

田宮「うゝん、でも10万はキツかったな、ねえサワツチ、あと近くで目ぼしいのなかったっけ」

穂沢「田園調布の資産家の件があるけど、72歳で一人暮らしの八代さん」

田宮「じゃそれいこうか、急ぎでプラン立ててくれる？」

穂沢「オツケ」

とスマホを操作し始める。

橋本「今日の宝石店のブツは、換金して俺等の口座に入るまでどれくらいかかるんすか？」

伊栗「業者で鑑定するのに2〜3日、で買い取り先を見つけるのに2〜3日でしょ、で売ったカネをエースコーポレーションの名義でスイスの口座に入れて、それからこっちに送金だから、4〜5日くらいですかね」

橋本「そうすか、そのカネが入れば皆で余裕で逃げられますよね」
伊栗「まあね、少なく見積もっても400を下ることはないでしょうから」

スマホを見ていた穂沢が顔を上げる。

穂沢「ヤバイ、もうネットニュースきてるよ、坂野が殴った金券屋の沼倉さん死んだって」

伊栗「やっぱり、やり過ぎたんですよ」

橋本「坂野が捕まったら俺等のこともバレるんじゃないスか？」

田宮「今日使ったスマホは全部焼却しないとだな」

穂沢「だね」

田宮「で取り合えずさ、今日のブツが送金されてきたら、すぐ逃げられる様に手配しとこうか」

穂沢「うん」

舞台袖からカルロスが声をかける。

カルロスの声「タミヤサン、タミヤサン」

田宮「えっ？」

カルロスの声「I have an announcement（お知らせがあります）」
田宮「なに？」

カルロスの声「Please come over for a moment（ちよつと来てください）」

田宮、立って下手へはける。

気になって見る三人。

戻ってくる。

穂沢「どした？」

田宮「日本の警察からフィリピン政府に俺等全員の引き渡し要請がきてるらしい」

穂沢「マジ？」

橋本「ヤベエじゃないスか」

伊栗「……」

橋本「逃げましょうよ、すぐここから逃げましょう」

伊栗「でもおカネがね」

橋本「今226万でしたっけ、それでも行けるとこまで行きましようよ、ここにいたら引き渡されちゃうじゃないスカ」

穂沢「国外に逃げるには一人100万はいるんだろ、226万じや二人しか逃げられないじゃん」

橋本「海外までは無理でもとりあえず収容所から出とけばいいじやないツスカ」

田宮「ここから出たとしても国内にいたら逃げ場はないよ、何処にいても絶対つかまるよ」

穂沢「だよな、それに逃げてたんじゃカネ稼ぐことも出来ないし」

橋本「じゃ、どうすればいいんスカ」

田宮「分かんないよ」

橋本「そんな」

伊栗「引き渡されるとしたら早くていつくらいになりますかね」

田宮「二、三日くらいじゃないか」

穂沢「ダメじゃんそんなの。それまでに逃げないと」

橋本「マジどうするんスカ？」

田宮「……」

伊栗「今朝のブツが換金して送金されるの待ってたら間に合いませんね」

田宮「田園調布の資産家の件、すぐ坂野にやらせよう。で現金が手に入ったら銀行から直接こっちの口座に振り込ませれば、すぐにでも引き出せるから」

伊栗「時間的に間に合いますかね、窓口だと3時までに入らないと閉まっちゃいますし」

田宮「今何時？」

伊栗「日本時間だと1時56分です」

穂沢「やるしかないっしょ。今日金曜だし、逃すと来週になっちゃうよ」

田宮「グリさん牧さんに電話して、車まだ捨ててないか確認して」
伊栗「分かりました」

とスマホを操作する。

田宮もスマホを操作する。

田宮「坂野、今どこ？」

坂野の声「はい、荻窪駅のホームで兵頭さん待ってます」

田宮「兵頭待たなくていいから、すぐ駅出て、さっき車降りた口

ータリーに行ってくれる？」

坂野の声「了解ッス」

伊栗「牧さんもう車捨てちゃいました？」

牧の声「いえ、まだですけど」

伊栗「そう、そしたらですね、急に予定変更になって恐縮なんですけど、荻窪駅に戻って、ロータリーで坂野君を乗せて田園調布の方に向かって欲しいんですけど」

牧の声「えっ、また仕事ですか？」

伊栗「はい、緊急案件なのでギャラは弾みますので。やって貰えませんか？」

牧の声「分かりました」

伊栗「新しい目的地はアプリに地図送ります」

伊栗は通話を切る。

田宮「坂野、牧さんの車が戻って来るから、乗って一緒に田園調布に向かってくれる？」

坂野の声「了解ッス、次のミッションスか？」

田宮「緊急ミッションで悪いんだけど、これはオレたちの命運が掛かった大事な任務だから、その分ギヤラもはずむからさ」

坂野の声「了解ッス！」

田宮「いつも任務は裏切者を出さないように複数でやって貰ってるけど、今回はお前を信じて一人で決行してほしいんだ」

坂野の声「勿論やります、信用して貰えて嬉しいッス」

田宮「アプリに現地の地図送るから、あとガムテープって持ってたっけ？」

坂野の声「はい」

田宮「よし、着いたら連絡して」

坂野の声「了解ッス」

田宮は通話を切る。

穂沢がスマホ画面を見ている。

穂沢「記事の続報出てるよ」

橋本「なんですか？」

穂沢「（読む）警視庁はフィリピンの収容所に収容されている特殊詐欺の首謀者たちに対して身柄の引き渡しを要請。この首謀者たちは日本で起きている闇バイトによる強盗事件を指示していたと見られ、実行犯たちからルフィと呼ばれている人物であるとされている」

橋本「ルフィって」

橋本もスマホを操作して画面を見る。

穂沢「首謀者って、俺たちのことだよな。でもこの記事だとルフ

「イって名前で通ってるひとりの人間みたいに思われてるな」
橋本「ルフィっていう名前の人物が一番悪いってことになってますね」

穂沢「もし俺ら全員パクられたらサ、誰がルフィなんだってことになるかな」

田宮「誰でもないだろ、ルフィって便宜上皆で使ってた名前なんだから」

伊栗「そうですね、バイトの人たちからも私たちは全員ルフィって呼ばれてたんですから」

穂沢「でもパクられたらサ、取り調べで訊かれるだろ、ルフィは誰だ〜って。警察は特定したがるんじゃないかね？」

伊栗「……」
穂沢「そんな時どうする？皆知らないってトボける？それとも誰か架空の人物でも設定しとく？」

伊栗「架空の人物では警察は納得しないと思いますよ、取り調べはそーとー詰められますから」

橋本「それじゃ誰がルフィなのかってこと、決めといた方がいいってことツスカね」

穂沢「ルフィは皆で使ってたけど、主導権持ってたのは誰かっていったら」

穂沢、橋本、伊栗は田宮を見る。

田宮「いやいやそれは違うでしょ、皆ルフィなんだから」

穂沢「でも決めとかないとサ、全員が厳罰ってことになっちゃーうんじゃないかね？」

橋本「主犯格が一番重い罪になるってことツスカ？」
伊栗「まあそれはねえ」

田宮「そんなのどうやって決めるんだよ？」

穂沢「ジャンケン？」

伊栗「いやいやそれは軽すぎるでしょう」

橋本「ウノとかどうすか」

穂沢「だったら俺は大貧民がいいよ」

橋本「トランプだったら自分はスピードがいいです」

田宮「ずるいよ皆自分の得意なのいって」

穂沢「んじゃやっぱアレか、アッチ向いてホイで」

田宮「ふっ、ススキノ出る時やったな、俺が勝ったじゃん」

穂沢「俺負けたことなかったんだけどな」

田宮「あん時俺が負けてたらさ、タイにもフィリピンにも来ない

で、こんなことになってなかったかもな」

穂沢「俺後悔してないよ。ていうかサ、なんで俺等もうパクられるの前提で考えてんの？要は捕まらなきゃいいんじゃない。

田園調布の件上手くやらしてサ、すぐカネ振り込まして、
今日中に逃げちゃえばいいんじゃない」

田宮「だな……坂野たち早く着かないかな。時間は？」

橋本「2時41分です」

伊栗のスマホが着信音を発する。

伊栗「はい」

牧の声「ルフィ、現地に着いたんですけど、道が狭くて家の前まで車で入れないんですよ」

伊栗「マジですか、車が入れるところから家までどれくらいあります？」

牧の声「さあ、30メートルくらいでしょうか」

田宮がスマホを操作する。

田宮「坂野」

坂野の声「はい」

田宮「そこで車降りて走って行ける？」

坂野の声「はい」

田宮「道具忘れないでね、あとガムテープも」

坂野の声「了解ッス、じゃ行きます」

車のドアをボタンと閉めて走って行く音。

伊栗「牧さんそこで待機してください。そこって停めてても他の車きたらすれ違いそうですか？」

牧の声「ギリギリですかね、でも他の車きそうにないですけど」

伊栗「なるべく近い場所で待っててあげてくださいね。宜しくお願ひします」

牧の声「了解です」

田宮「坂野、もう今回イチかバチかだからさ、八代さんて72歳のジイサン一人暮らしのはずだから、宅配便作戦でいって入れたらすぐ殴って手足縛って金庫のダイヤル聞き出してくれ、とにかく現金が必要だから」

坂野の声「了解ッス」

玄関の呼び鈴を押す音。

伊栗「牧さん、坂野が戻ったらすぐ駅前の三友銀行に向かってほしいんで、マップで場所よく確認しといてくださいね」

牧の声「分かりました。でもあのすいません。ちよつと気になる

ことがあるんですけど」

伊栗「何ですか」

牧の声「いえあの、気のせいかもしれないんですけど、あ、やっぱりいいです」

伊栗「なんですとか？大丈夫ですか？」

牧の声「はい、大丈夫ですけど」

伊栗「銀行の窓口が開いている3時まで間に合いたいので、特急便でお願いしますね」

牧の声「分かりました」

坂野の声「こんにはは、宅配便のお届けです」

ガチャリと玄関の開く音。

八代の声「はい？」

坂野が無理やり中へ押し入る音。

八代の声「何ですか」

坂野の声「金庫どこ？」

バタバタと八代を連れて奥へ向かう音。

坂野の声「どこだっけ聞いてんだよ！」

ドカドカと八代を殴る音。

坂野の声「あるじゃんかよ」

八代の声「なんですとかやめてください！」

坂野の声「大人しくしないと殺すぞ！」

八代の声「やめてください」

坂野の声「大人しくしたらやめてやるよ。寝転んで両手出せよ」

八代を倒し、両手をガムテープでグルグル巻きにする音。

坂野の声「両足もそろえろよ」

ガムテープでグルグル巻きにする音。

坂野の声「金庫のダイヤルの番号教えろ」

八代の声「……」

坂野の声「教えろっていつてんだよ！」

八代の声「右に38」

ガチャガチャとレバーを操作する音。

坂野の声「なんだよ、開いてんじゃんかよ。ルフィ、金庫開きま
した！」

田宮「よし、現金ある？」

坂野の声「百万の束が6個あります」

田宮「全部取ってすぐ車に戻って」

坂野の声「このオッサンどうしますか？」

田宮「口も喋れない様にガムテで塞いで、そのまま動けない様に
しとけばいいから」

坂野の声「了解ッス」

伊栗「牧さん。今坂野さんが来ますからね」

牧の声「……」

伊栗「牧さん、聞こえますか？」

牧の声「あのすいません。私やっぱり間違いないと思うんですけど」

伊栗「何がですか？」

牧の声「今日の宝石店から取ったブツの鞆を駐車場で強奪したの
つて、坂野さんじゃないですか？」

伊栗「えっ？」

牧の声「さっき車から出て走って行く時の走り方見て思ったんで
す、走り方が同じだった気がするんですけど」

伊栗「そんなはずないじゃないですか」

牧の声「いやでもアイツですよ」

坂野の声「ルフィ！車が無いです」

田宮「なんでだよ」

伊栗「牧さん！坂野を乗せて銀行行ってくださいよ」

牧の声「いやでも裏切者じゃないですか、またカネ取るつもりで

すよ、車で跳ね飛ばしてやりますよ」

伊栗「そんな、そんなのやめてください」

エンジンを吹かして急発進する音。

田宮「坂野気をつけろ、車が向かってこないか？」

坂野の声「わあーっ！」

ガシヤンとクラッシュする音。

伊栗「牧さん？牧さん？」

牧の声「……」

田宮「どうした、坂野？」
坂野の声「車避けたら壁にぶつかってます。牧さんどしたんスカ」
田宮「牧さんどうなってる？」
坂野の声「分かんないス、氣失ってんだか俯いてます」
田宮「もういいからそのまま走って駅の方に向かってくれろ？」
坂野の声「え、でも」
田宮「もう間に合わないんだよ！3時までには絶対銀行入れ！」
坂野の声「あ、はい」

パタパタと走り出す音。

田宮「車で来た方向に戻って」
坂野の声「は、はい、ハアハアハアハア……」
田宮「サワツチあと何分？」

穂沢「2分」
田宮「坂野最初の信号右に曲がって、そこで次の信号左ね、急げ
！間に合ったらギヤラ100万でもいいぞ」
坂野の声「ハア、ハア、ハア、ハア……」
田宮「そのまま真っ直ぐ行って、そしたら駅前の広場になってる
手前の右に銀行があるから、三友銀行の看板があるはずだ
から」
坂野の声「ハア、ハア、ハア、ハア……」
穂沢「あと1分」
坂野の声「あった……半分シャッターが降りてる」
田宮「滑り込みで入れ！」
坂野の声「すいません！すいません！入ります入ります。ワァー
っ」

入口の床に転げ込む音。
ガシャンとシャッターが降り切った音。

坂野の声「ハア、ハア、ハア、ハア……」

田宮「入ったか？」

坂野の声「ハア、ハア、はい……」

田宮「よし！」

案内係の声「あの……いらっしやいませ。今日はどういったご用件でしょうか」

田宮「坂野、そのカネを外国の銀行に振り込んでもらうから。ホントは全額振り込みたいけど、あんまり大金だと怪しまれるから、三百万だけ振り込んでくれる？振込が無事にできたら今回のギャラ100万ね」

坂野の声「あざっす」

田宮「銀行の人に、海外の銀行に振り込みたいんですって言って」
坂野の声「あ、あの、おカネ振り込みたいんですけど、海外の銀行に」

案内係の声「かしこまりました。それでは番号札をお持ちになつて、こちらで用紙に記入していただけますか」

坂野の声「あ、はい」

歩いて筆記用のテーブルに戻る音。

田宮「振り込み用紙だろ、俺のいう通りに記入して」

坂野の声「はい」

田宮「振込先の欄に、CEP銀行、アルファベットでC、E、Pね、タギッグ支店。カタカナでタ、ギ、ツ、グ、振込み先の名義はエースコーポレーション。口座番号は85629」

3 1。金額は三百万円ね、一十百千万十百万、でゼロが6つだからね」

坂野の声「……はい」

橋本「おもしろいけそうですね」

穂沢「うん」

ピンポンと番号の呼び出し音。

呼び出し電子音声「125番の、カードをお持ちのお客様、1番

窓口へお越しください」

坂野の声「は、はいっ」

と歩いて行く音。

田宮「坂野、記入した用紙と百万の束三つ出して、窓口の人には俺のいう通りに言ってくれろ？」

坂野の声「はい」

窓口係の声「いらっしやいませ。お振込みですね、承ります。コレはどういった用途の資金でしょうか？」

田宮「事業の運営資金です」

坂野の声「事業の運営資金です」

窓口係の声「資金の出資元はどちらになりますか？」

田宮「私が日本で運営している商社から、フィリピンの支店への口座移し替えです」

坂野の声「あの、日本でやってる商社からフィリピンの支店に口座の移し替えです」

窓口係の声「その日本の商社のお名前をお伺いできますか」

田宮「……それはちょっと事情があって申し上げられないのです」

が」

坂野の声「それは事情があつて申し上げられませんが」

窓口係の声「それではお振込み先のご名義、＼エースコーポレーション様の業務内容は、どういった事業を展開されていらつしやいますか？」

田宮「地元の民芸品とか、アクセサリーとか装飾の小物とか、主に雑貨の買い付けと日本への輸入事業を行っております」

坂野の声「地元のえゝつと民芸品とか、アクセサリーや小物とか、雑貨の買い付けとか、日本に輸入する事業です」

窓口係の声「承知いたしました。それでは今お振込みにいらして
いる方ご本人の確認書類を提示していただけますでしょうか」

田宮「坂野、免許証持つてるだろ？」

坂野の声「（小声）はい……でも俺の身元が記録に残らないッス

かね」

田宮「大丈夫だから心配すんな、どころらだつてカネが入れば逃げられるだろ」

坂野の声「はい……あ、コレ免許です」

窓口係の声「ありがとうございます。ではこちらの用紙に、お客様
様の住所氏名、この度のお振込み資金の用途をご記入頂
けますか」

坂野の声「はい」

窓口係の声「あの……」

坂野の声「はい？」

窓口係の声「すみません。御社のお名前で検索してみたところ、

正規の登記を確認できないのですが」

坂野の声「えっ」

窓口係の声「エースコーポレーション様で間違いございませんで

「しょうか」

坂野の声「そうです、その会社の口座に振り込むんです」

田宮「坂野、スマホスピーカーにして窓口の人に向けてくれる？」

坂野の声「はい」

田宮「すみません。私社長の鈴木と申します。実はまだ事業を始めたばかりでして、現地での登記の手続きが済んでないもんですから」

窓口係の声「でもこの度お振込みの資金は、これまでの事業で計上してきた利益ということではないんでしょうか？」

田宮「あ、それはそれまで別の会社で作ってきた資金なんです」

窓口係の声「それでは、その企業のお名前をお教え頂けますか」

田宮「あゝすいませんそれは、事情があつてお伝えできないんです」

窓口係の声「そうですか、でもちよつと金額が大きいので、不審

なところがありますと、確認できるまでお預かりできないのですが」

坂野の声「今ここにカネあるじゃないですか、不審じゃないですよ。振り込みしてくださいよ」

田宮「バカ、坂野」

窓口係の声「不審な点があると判断した場合には、警察に通報することになります」

坂野の声「とつとと振り込めよ、ふざけんなこのヤロウ！」

ガン！ とボールでカウンターを殴る音。

田宮「……」

穂沢「なにやっつてんだよ」

警備員の声「ちよつと、お客様何するんですか」

坂野の声「うるせーな放せよ！」

警備員の声「お待ちください」

坂野の声「ふざけんな」

警備員の声「ちよつと、通報して！」

坂野の声「オイ、俺のカネだろ、返せよ！」

田宮はスマホを床に叩きつける。

橋本「最悪ッスね」

伊栗「……」

カルロスの声「Everyone, snacks are ready (みなさん、おやつ
の用意ができました)」

橋本「おやつ時間ですね」

無言の4人。

カルロスの声「Don't you eat snacks? (おやつ食べないんです
か?)」

橋本「俺貰ってきますよ」

と立ち上がる。

穂沢「あ、俺もいくわ」

と一緒に下手へはける。

頭を抱える田宮。

スマホを操作する伊栗。

相手の呼び出しコールが続く。

伊栗「……出ませんね牧さん」

通話を切る。

橋本がトレイにクッキーが入った皿を4個乗せてきて、それぞれの場所へ配る。

穂沢は4個のマグカップを乗せたトレイとティーポットを持ってくる。

橋本「あ、俺やりますよ」

穂沢「うん」

橋本は4つのマグカップにお茶を注ぎ、皆に配る。4人は意気消沈した様子で手をつけようとしない。

穂沢「飽きたなあ、ここの食い物も」

橋本「日本のラーメンが喰いたいッスねえ」

穂沢「強制送還されれば喰えるよ」

橋本「でも、ラーメン屋とか行かして貰えないんじゃないスカね」

伊栗「羽田空港には美味しいラーメン屋がいっぱいありますけどね」

穂沢「でも喰わして貰えないでしょ」

橋本「こっから逃げて、日本に戻っても捕まるリスクが無くなるのって、どのくらいかかりますかね」

田宮「さあねえ」

橋本「そうだ、自分でこっそり日本戻って、警察に見つかる前に

食べちゃえばいいんすよ。俺三軒はハシゴして喰いますよ」

穂沢「そうまでして喰いたいか」

橋本「喰いたいッスよ。もしパクられても、優しい刑事さんとか
がムシヨ行きの前に喰わしてくんないかなあ」

伊栗「そんなお情けがあるといいですけどね」

橋本「じゃ拘置所でラーメンの出前とか頼めないかな。あ、ムシ

ヨの中でもたまに食事でラーメン出ないスカね、昼飯とか」
田宮「パクられてでも喰いたいんだ？」

橋本「……喰いたいッス」

4人力なく笑う。

田宮「とにかくさ、ここから逃げるしかないんだよ、そこで体制

立て直してさ、カネと安全が確保出来たら日本帰れるんだ
から」

橋本「そうッスね」

穂沢「はあ、あ、一生遊んで暮らせるカネが欲しいだけなんだけ
どな」

橋本「美味しいラーメン喰って、いい車に乗って、彼女と一緒にピ
カピカのタワマンに住みたいだけなんスけどね」

伊栗「私にはそんな欲はないなあ」

橋本「んじや伊栗さんは何の為にやってんスカ？」

伊栗「私はただ、どんなにギャンブルで負けても、使い切れない
くらいのおカネがあるといいなと思ってます」

田宮「要するに全員どうしようもないってことだな」

4人笑う。

橋本「んじや田宮さんはどうスカ？何の為に〜とか」

田宮「俺は法律から自由でいたい、かな」

橋本「法律？」

田宮「結局人間ってみんな法律にねじ伏せられて生きてるじゃん。犯罪者以外は、俺も法律にねじ伏せられたくないんだよ」

橋本「何か、カッコ良いスね」

穂沢「ミヤさん昔からそんなこといったたよね」

橋本「へえ、法律から自由ねえ……」

橋本がクッキーを食べ始め、お茶を飲むと胸を押さえて苦しみ出す。

橋本「うっ……ぐええええっ……」

伊栗「どうしました？」

橋本「いてえ！いつてえグエエエ」

伊栗「大変だ食あたりかな？ちよっと、医務室行きましょう」

橋本は口の端から血を垂らしている。

伊栗は橋本を抱えて立たせ、下手へ連れていく。

穂沢「大丈夫かよ」

伊栗「ちよっと！ Someone please help him. He suddenly started to suffer (誰か助けてください。彼が急に苦しみました)」

と橋本を連れて下手へはける。

田宮「……」

田宮はハツとして食べようとしていたクッキーを放

り出す。

穂沢もマグカップを手放す。

田宮「あれお前、青酸だろ」

穂沢「……」

穂沢は自分のザックを取り、逆さにして中の物を出す。

穂沢「アレ……ないな、青酸カリの瓶」

田宮「ホントかよ？やったの？」

穂沢「いや、俺じゃないよ」

田宮「じゃ誰？グリさんが？」

穂沢「……」

伊栗が戻ってくる。

田宮「どうした？」

伊栗「いや、死にましたけど」

穂沢「マジ？」

田宮「なんで？」

伊栗「いや、食中毒か、アレルギーショックじゃないかって」

田宮「グリさんやったの？」

伊栗「やったって？何を？」

穂沢「じゃ、アンタこれ飲んでみなよ」

とお茶のマグカップを差し出す。

伊栗「やめて下さいよ」

田宮「……でも、これで一人減ったってことか」

穂沢「もしあと一人いなくなつて、二人になれば、カネが足りてここから逃げられるんじゃない？」

田宮「ホントはもう一人死ねば良かったと思つてるんじゃないの？」

穂沢「誰が？」

顔を見合わせる三人。

伊栗「ともかく、三人になつた訳ですから、このうちのどの二人

が逃げられるのか、決めなければならぬですよ」

穂沢「もしくは、三人で仲良く送還されるか」

伊栗「いずれにしても公平に、後で恨みっこなしでことで、抽

選とか、クジ引きではどうですか？」

沈黙。

穂沢「はあ、あ、もつかいススキノに戻つてやり直してえなあ」

田宮「うん、今度はもつと上手くやれるといいな」

と田宮と穂沢は目配せをし、伊栗を見る。

伊栗「はい、やっぱりそうなりますよね。貴方たちお二人は同郷のご出身だし。私だけこうして年長で世代も離れてますしね。そう思つて今、手を打たせて頂きました。ネットバンクのパスワードを変えましたので、お二人とも口座にアクセスすることはできません」

田宮と穂沢、スマホを操作してみる。

穂沢「やりやがった」

田宮「……」

伊栗「ここに残ってたら日本に戻されて刑務所行きですから、私は殺されても喋りません。拷問するだけ嫌な気分になって時間の無駄ですよ」

田宮「そういうことはしないよ俺等は」

伊栗「そうですよね」

穂沢「じゃどうすんの？」

伊栗「ここから逃げられるのは、私とあと一人、貴方たちのどちらでも構いません。私は一足先に出させて貰います」

と身の回りの物を鞆に入れ始める。

伊栗「カルロスに頼んで病院に入ったら、口座の新しいパスワードをお二人に送信します。その後どちらがお逃げになるのかは、お二人で決めてください」

荷物を鞆に詰めていく伊栗の手が止まる。

伊栗「でも、こうなっちゃいましたけど、なんか、楽しかったですよね」

田宮「えっ？」

穂沢「ふっ、バカなヤツらラジコンみたいに操ってな」

伊栗「私たち、まるで神様になったみたいでしたよね」

田宮「それを言うなら悪魔だろ」

穂沢「確かに」

三人笑う。

伊栗「それじゃ、お先に失礼します」

と鞆を持って下手へはける。

伊栗の声「Hey Carlos, take me to the hospital (ねえカルロ

ス、私を病院へ連れて行ってください)」

田宮「……どうしょっか」

穂沢「うん。やっぱさ、俺たちの勝負はアレじゃね？」

田宮「アレか」

穂沢「うん」

田宮「早いしな、やるか」

穂沢「恨みっこなしだよ、じゃ、ジャンケンから」

田宮「うん」

穂沢「いくよ」

田宮「うん」

穂沢と田宮「ジャンケンポイッ！」

穂沢がグー。田宮はチョキ。

穂沢「アツチ向いてホーイ！」

穂沢は右を差す。

田宮は左を向く。

穂沢と田宮「ジャーンケーンポイツ！」

穂沢はパー。田宮はチヨキ。

田宮「アツチ向いてホーイ！」

田宮は上を差す。

穂沢は右を向く。

穂沢と田宮「ジャーンケーンポイツ！」

穂沢がチヨキ。田宮はパー。

穂沢「アツチ向いてホーイ！」

穂沢は右を差す。
田宮も右を向く。

穂沢「シヤア！」

田宮「……」

穂沢「悪いね」

田宮「……」

穂沢は身の回りの物を鞆に入れていく。

穂沢「またどっかで会うこともあるっしょ」

田宮「うん」

穂沢「そんな時や、また一緒に何かやろうよ」

田宮「だね」

穂沢「あ、コレ置き土産」

とガラスの小瓶を投げる。

受け取る田宮。

田宮「やっぱ青酸か」

穂沢「おやつ取りにいった時お茶のポットに入れたのよ。あとダ

リさんが飲んでくれたりや二人で逃げられたのになあ」

田宮「ていうか俺が飲んでたら？」

穂沢「タミさんは慎重だから、他の人が飲むまで飲まないっしょ」

田宮「え、ホントかよ？そんなのどうだか分かんないだろ」

穂沢「そうね、ま、これで良かったのかな」

田宮「……」

穂沢「何かの時に役立ててよ。じゃ」

田宮「うん」

穂沢は鞆を持って下手へはけていく。

穂沢の声「Hey Carlos, take another person to the hospital

(おいカルロス。もう一人病院に連れてってくれ)」

田宮はスマホを拾い、操作する。

田宮「もしもし」

坂野の声「あ、ルフィー！俺どうしたらいいッスか？金券ショップの人死んだってニュース出てるし、どうしたらいいッスか？」

周囲から繁華街の雑踏の音が聞こえる。

田宮「カネはどした？」

坂野の声「銀行で警備員に取られちゃいました」

田宮「全部？」

坂野の声「はい、三百万はカウンターに置いてたンスけど、鞆も引っ張られて、そのまま取られちゃいました」

田宮「……」

坂野の声「どうしたらいいスカ？俺の名前もネットに出てるし。

街中オマワリばかりだし、カネもないし逃げられないスよ」

田宮「……」

坂野の声「ねえルフイ、俺どうしたらいいッスカ？なんか命令下

さいよ、次の指令ないんスカ？」

田宮「今何処にいる？」

坂野の声「銀座ッス、人が多いとこにいた方が見つからないと思
って」

田宮「そう、じゃ緊急の指令を与えるから」

坂野の声「はいっ！」

田宮「ボール持ってる？」

坂野の声「はい」

田宮「じゃ、それを両手で持って、沼倉さんを殴った時みたいに」

坂野の声「はい」

田宮「持ったかい？」

坂野の声「はい」

田宮「自分の前で出来るだけ離して持って」

坂野の声「はい」

田宮「それを思いっきり自分の頭に打ちつけて」

坂野の声「はい」

田宮「いいかい、思いっきりだからね、躊躇すると失敗するからね」

坂野の声「了解ッス」

田宮「せーのでやれよ」

坂野の声「はい」

田宮「いくぞ、せーの！」

坂野の声「せーの〜！」

ガコンと衝撃音。

田宮「もつとやれ」

坂野の声「うう〜」

ガコンと衝撃音。

田宮「まだ、出来るうちはやめるな」

坂野の声「うあああ〜」

ガコンと衝撃音。

辺りで悲鳴が上がっている。

ドサリと倒れる音。

通行人B（男性）の声「おい、なにやってんだ」

通行人C（男性）の声「大丈夫ですか、誰か救急車呼んでください

い！」

通話を切る田宮。

田宮「ご苦労さん」

青酸カリの小瓶を上放っては掌で受ける。
暗転。

おわり